



教材研究としての志賀直哉論(二〇一四年度卒業論文 要旨集)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学国語国文学会・札幌 公開日: 2015-11-24 キーワード: 作成者: 河原, 未佳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007485

教材研究としての志賀直哉論

国語科教育学研究室 一四〇一 河原 未佳

本研究では、志賀の全作品について、描写に着目した文体の表現方法と、時代ごとに変化する作品の構造について考察した。児童の文学作品を読む力を育むための教材として、志賀の作品は価値があると考えたためである。まずは、描写を「文章によって表現対象の姿を具体的・絵画的に描き出す表現方法の一つである。」と定義した。

志賀の作品は、執筆時期によって、描写と心理的表現の作品の構造が変化している。『或る朝』から『兎を盗む話』までの作品は描写の連続で書かれているのに対し、『城の崎にて』から『暗夜行路』までの作品は描写と心理的表現が交互に書かれている。志賀の個人的体験を読み手にも伝わるよう意識して、緻密な描写に心理的表現を加えた『城の崎にて』から『暗夜行路』までの作品が教材として優れていると考察した。

志賀は作品中の「私」に自身の体験を重ね合わせて書いている作品が多い。しかし私は、志賀の意図は経験を語ることでではなく、的確な描写を通して、読者に場面の様子や登場人物の心情を実感を持つて理解させることだったと考える。『創作余談』で語っているように志賀は、映像として頭に浮べた場面を文章にするという創作をしている。この創作態度が絵画的な描写をする方法であることが明らかになった。